

GOOD AGER AWARD 2026

田中 信明

株式会社ガイアコンタクト CEO
元国連事務次長

Text:Yamamoto Youko
Photo:Nagayama Taro

力強く、軽やかに
自分の道を行く





ヴァイオリニストを目指していた幼少期にお母様と

外務省入省から40年余、サンフランシスコ総領事や国連事務次長として世界を舞台に活躍した田中信明さん。湾岸戦争の対米交渉など激動の「修羅場」を支えたのは、環境への順応と多忙でも自ら時間を作る独自の哲学だった。今年80歳を迎え、囲碁やメルカリアを楽しみながら人生を謳歌する田中さんに、かっこよく歳を重ねる秘訣を伺った。

挫折が開いた国際舞台への扉

田中信明さんの国際的な歩みの原点は、音楽の道への挫折にあった。ピアノリストの母のもと、3歳頃からヴァイオリンに打ち込み、10年近くにわたって日本を代表するヴァイオリニスト・篠崎さんに師事した。しかし、プロのヴァイオリニストを目指す母の期待とは裏腹に、師匠から「才能がない」と断言され、その道を断念することになった。

この挫折が、田中さんの人生の舵を大きく切ることになる。「国際的な分野で活躍したい」という思いから中学時代に英語を本格的に学び始め、サンフランシスコに住むベンバルと3年間文通をする。やがて連絡は途絶えたものの、世界への憧れは消えず「留学するなら外交官が一番早い」と外交官試験に挑戦。東京大学法学部を卒業した1970年、外務省の門をくぐった。

順応力を武器に世界を渡る

入省後、最初に降り立ったのはイギリス。ケンブリッジ大学キングス・カレッジに研修留学し、経済学修士号を取得する。

「当時の日本はまだ海外へ行くこと自体がまれで、バンコク、ドバイ、ギリシャなどを経由してようやくイギリスにたどり着くような時代。石造りの荘厳な建物、夜10時になっても明るい空、入浴の作法に至るまで、すべてが強烈なカルチャーショックでした」

あらゆるものが「物珍しく、堪能すべきもの」だったというロンドンで受けた衝撃は、田中さんの「好奇心の原動力」となった。その後もワシントン、バンコク、イスラマバード、アンカラと赴任地は転々としたが、どこへ行っても「そこで楽しいことを見つけ出す」好奇心が、外交官として世界を渡り歩く最大の武器になった。

帰国後は小和田恆さんや有馬龍夫さんら上司に鍛えられた。なかでも胸に刻まれたのは、有馬さんの「仕

Profile ● たなか のぶあき

1946年千葉県生まれ。東京大学法学部卒業後、1970年外務省入省。ケンブリッジ大学キングスカレッジ卒（経済学修士）。世界平和研究所主任研究員、早稲田大学国際部非常勤講師（1987～1992）、同志社女子大学教授（2002～2004）を勤めながら、大洋州課長、企画課長、北米一課長、外務情報道官、北米局・総合政策局審議官、サンフランシスコ総領事、駐パキスタン大使などを歴任。国際機関の経験が長く、1980年代には国連広報局に明石康事務次長の下で広報官、1994～1997年にユネスコ事務次長（財政、人事、総務担当）を務める。その実績と経験が評価され、2006～2007年にアナン事務総長を補佐し、国連事務次長（軍縮局長）に任用される。その後、2007～2011年に駐トルコ日本国大使を務める。2011年にガイアコンタクトを設立。ワイン・エキスパート、WSET上級有資格者、ブルゴーニュ・ポルドー騎士団員。



事はつま先でやれ。お前はかかとか座っている」というひと言。腰を据えて構えるな、常につま先立ちで機敏に動けという叱咤だった。

その鍛錬が試されたのが、北米一課長として直面した湾岸戦争だ。国家の命運を左右するような極限の緊張感のなかで、対米交渉の最前線に立ち続けた。アマコスト駐日大使から人員派遣を強く求められたが、日本政府としては憲法上の制約から対応できず、邦人救出にも動けなかった。

「結果的に増税して抛出した1兆1700億円も、クウェートの感謝声明に日本の名前すら載らず、苦い経験になりましたね」

その後、サンフランシスコ総領事、駐パキスタン大使を歴任し、2006年には国連事務次長（軍縮



1920年代をはじめとする稀少なヴィンテージボトルとこれまでに会ったワインの記録を綴ったワインジャーナル

局長）に就任。クラスター爆弾禁止条約への政策転換を実現した。サンフランシスコ総領事時代には空港の分厚い電話帳を何度もめくり、かつてのペンパルを探し当て約40年ぶりの再会も果たしている。

時間は自分で作るもの

世界の修羅場を駆け抜ける傍ら、田中さんは公私にわたる自己研鑽を怠らなかった。1982年からワインのテイステイング記録をつけ始め、駐トルコ大使時代にはアンカラでテイステイング会を10回以上主催。やがて外務省初のワイン・エクスパート資格を取得し、世界標準のワイン資格「WSET」の上級資格も手にした。

「時間は与えられるものではなく、



尊敬する中曽根康弘元首相と

作るものです。忙しければ忙しいほど、自由な時間は生まれます」

毎日深夜12時過ぎまで働くのが日常だった課長時代も、この哲学は揺らがなかった。外交白書を書き上げると局長に原稿を「ポンと投げて」3週間ハワイへ旅立つなど、既成の枠にとられないアバンギャルドな生き方を貫いてきた。「私の道を行く、という感じがすかね」と、田中さんはいたずらっぽく笑う。

物を捨て、知を残す

2011年にコンサルティング会社「ガイアコンタクト」を設立し、中東・アジアの情勢発信を続ける田中さん。現役時代は自ら変わることで異文化に飛び込んできたが、年齢を重ねた分だけ、もう無理に自分を



安倍晋三元首相と

変える必要はないという。
「培ってきた知恵や経験を生かして、うまくやっていくほうがずっといいですよ」

体の面では、1980年代後半からレトルトや缶詰、出来合いの調味料を一切使わない食生活を30年以上継続。地道ながらも、長年の積み重ねによる差を実感しているという。
一方、3年前に始めた囲碁に夢中だ。「若い脳なら碁盤を幾何学的にパツと捉えられるが、年を取ると論理で一手ずつ追うしかない」と悔しがりつつ、週に一度は日本棋院に通う日々。

メルカリで身の回りの物を手放す断捨離にも励んでいる。「もう欲しいものはない。今は捨てていく自分です」。物を手放した分だけ、新しい学びに時間を注ぎ込む。仕事であれ趣味であれ、何かを追い求め続けることが、人生にやりがいを見つける秘訣なのだと、田中さんの生き方が教えてくれる。

幾多の苦難を乗り越えながら日本の外交を支えてきた田中さんは、今も決して守りに入らない。自らの人生を肯定し、培ってきた知識と経験を武器に、これからの道を切り拓き続けている。いつまでも力強く、軽やかに進化を続けるその背中には自分らしく歩み続ける生き方そのものだ。